

2020年8月23日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「過越と十字架」

聖書：出エジプト記12:21～28

ここは「最後の災い」が記されている。イスラエルの民を救出するためにエジプト中の初子が死に直面するというもの。この最後の災いから免れるためには、羊の血を家の入口の鴨居や二本の柱に塗ることにより、災いが過ぎ越して行くというものであった。その晩、災いがエジプト中に襲い、ファラオ(王)の初子をはじめ、多くの人びと、家畜の初子にも死がもたらされた。この「最後の災い」によって、ついに頑(かたく)々なファラオも懲(こ)りて、イスラエルの民がこのエジプトから去らせること、奴隷の身から解放されることを認める。小羊の血を家の鴨居や柱に塗ったイスラエルの民は、その災いから免れたのであった。イスラエルの人びとは、この出来事を世々にわたってこの日を記念とし、神が成された御業を覚えユダヤ教の三重大行事の一つとして「過越祭」がある。

キリスト教はこの「過越祭」の行事はないが、私たちはこの「過越」の出来事をどう見て行くべきか？ 今度はエジプト人が犠牲になって、神を信じるイスラエルの人びとは災いが過越して行き、良かった、良かった・・・とするのか？ それでは「目には目を、歯には歯を」という復讐の何物でもない。暴力の連鎖による復讐、暴力が肯定される物語になってしまう。私たちは、旧約の物語を見る時、同時に新約と照らし合わせ、キリストの業と合わせて見る必要がある。

過越しの出来事には、羊が殺されその血を鴨居に、柱に塗ることにより、その災いが過越して行くというもの。その血は、福音書で見て行く時に、イエス・キリストの十字架の血ということになる。イエス・キリストが、何故、十字架へと向かわざるを得なかったのか？ 何故、神の子が殺され、血を流さなければならなかったのか？ そこにファラオの頑(かたく)々な心があったがゆえであり、権力者の誤った道、判断が羊の血を流すということになったのであり、イエス・キリストが十字架へとむけられてしまい血を流すということになってしまう。そのことをまず、歴史的観点から見逃してはいけない。そして、キリストの十字架は、決しておしまいではなく、復活の希望へと私たちは示されている。そして過越しの出来事もまた、エジプトからの脱出、苦難からの解放であることを聖書は示している。

私たちの神は、歴史の只中に居られることを覚えながら、権力におもねることなく、民衆と共に歩む教会でありたいと願う。(神谷)